

浄土真宗における導き手の教学史的研究

黒田義道

序、本論の課題と方法

本論は、浄土真宗における導き手の見方について教学史的に論じるものである。善知識と呼ばれる導き手を中心に考察し、親鸞から蓮如に至る展開を考えていく。

親鸞が法然を生涯にわたり篤く尊敬し続けたことはよく知られている。親鸞は法然について随所で「本師源空」など師の敬称をつけて敬い、また『高僧和讃』では「真の知識」とも述べている。本論で論じる「導き手」とは、このように師や知識・善知識と呼ばれる存在のことである。

こうした導き手について、これまでの真宗教義学や真宗教学史研究ではあまり注目されず、十分に明らかにされているとはいえない。しかし、親鸞の教義において、導き手の存在は、やはり重要である。親鸞によれば、人間とは往生成仏に役立つものを何一つ持たず、迷い続けるより外ないものである。そのような者が、他からの導きなしに阿弥陀仏の本願力に遇うことは考えがたいからである。

本論の課題は、浄土真宗における導き手の見方について、教学史的に明らかにすることにある。特に善知識と呼ばれる導き手を中心に論述を進め、善知識がどのように見られてきたのか、その教学史的展開を明らかにすることが本論の目的である。まず親鸞を取り上げ、続いて関東を中心とした最初期の親鸞門流、さらにその後の教学史上重要な存在である覚如・存覚・蓮如を取り上げたい。

さて、本論の考察を進めるにあたり、次の三点に注目したい。第一点は、導き手、特に善知識への言及が何を目的に、どのような立場から行われているのか、言及の視点に注目することである。第二点は、可能な限り、「導き手として人々を導く立場」と「導き手によつて導かれる立場」の両面から、善知識がいかなる導き手であるとされているのかに注目することである。第三点は、教学上の展開と同時に、その歴史的背景に注意することである。第二・三点は第一点をより明らかにするための注目点である。

また、本論では、師と善知識とを明確に区別する。これは仏教一般での理解に則ったものである。両者はもともと別々の言葉である

が、ともに衆生を導くという大きな共通点があるためか、これまでの教学史研究ではその区別がしばしば曖昧にされている。師と善知識について、仏教一般での理解を確認すると、まず師とは弟子に対する語で、導く者・導かれる者という、いわば縦の関係を念頭に置いた用語である。導きの方向は様々で、必ずしも限定できない。一方、善知識とは、悪知識に対する語で、導きの方向の善悪に注目した語である。「知識」とは、もともと友人・知人の意であり、いわば横の関係が念頭に置かれている。善知識の役割について、『摩訶止観』には教授・同行・外護の三種が挙げられている。本論においては特に同行の役割が重要である。本論はこの区別をした上で、善知識を中心に論じたい。

一、親鸞における導き手の考察

まず初めに、親鸞が導き手をどのように見ていたのか、師と善知識との相違に注意しながら考えたい。

親鸞は、衆生の救いのすべては阿弥陀仏の本願力回向によるとする。したがって、衆生の救いに関わる導き手は、阿弥陀仏の本願力に包摂されると言える。『教行信証』や『唯信鈔文意』、『高僧和讃』、『弥陀如来名号徳』などから、親鸞が光明や応身・化身などの仏身は名号の徳であると見ていたことが窺える。親鸞は、たとえば法然について阿弥陀仏の智慧光の力によって現れたものとしたり、阿弥陀仏の化身であると示している。名号には具体的な導き手となつて

末世の衆生に至るといふ徳が具わっているのである。また、親鸞が報恩の対象として、仏恩のほかに挙げるのは、師・善知識といった導き手だけである。これは種々にあらわれる本願力のはたらきについて、親鸞が特に導き手として現れる相に注目していたことを示すものである。

さて、親鸞は師・善知識の語をどのように用いているのであろうか。その用例の特色を考えるため、師・善知識のそれぞれについて、①具体的に指示される人物、②導きの方向、③どちらか一方に特徴的に示される場面、以上の三点について対比した。その結果、次の三点を明らかにすることができる。①師によって示される人物は広範であるのに対し、善知識によって示される人物は、釈尊、法然などごく限られる。②善知識は必ず本願真実に導くが、師の導きの方向は限定できない。③師は相承が意識される場面で用いられる点に特色があり、善知識は衆生が本願真実に出遇い信を得るといふ、重要な場面に現れる点に特色がある。

さらに、善知識についてまとめた言及が見られる『教行信証』「化身土文類」真門釈と『愚禿鈔』二河譬釈を検討すると、そこに見られる善知識に対する親鸞の姿勢は、信心を得た立場から、獲信の過程を振り返り、善知識に遇えたことをよろこぶというものである。換言すれば、親鸞は基本的に導かれる立場から善知識を論じているということであり、また善知識は行者一人ひとりに個別の存在であるということである。

では、親鸞は自身が導き手となる場合を、教義的にどのように考えていたのだろうか。親鸞は現に導き手として教化を行っていた。

一方、自らを他者を導くことのできない愚者と位置づけてもいた。こうした矛盾するかのような態度について注目したいのが「信文類」に示される現生十益（特に常行大悲・知恩報徳の両益）および其仏弟子釈である。ここでは、信心を得た行者は導き手となり得るのであり、それは弥陀回向の信心が持つ徳によることが示されている。信心を得たといっても行者が愚悪の凡夫であることが自体に変化はない。親鸞は自身の教化によって本願真実が弘まることすべてを、本願力のはたらしによるものと捉え、自らが導き手とされることを信心を得た者の現世利益と受け止めたのである。

さて、親鸞が師の立場、善知識の立場に置かれる場合をそれぞれ考えておきたい。まず、親鸞自身が他者から師とされることについて、親鸞は人師たることを好む自身の姿を厳しく見つめ誠めている。親鸞は師弟関係そのものを否定したわけではなかったが、門弟たちから師と呼ばれることがあっても、同行・同朋の立場で接し、彼らと共に真仏弟子であらうとした。一方、親鸞を善知識と仰ぐ門弟がいることについては、一人ひとりの行者の問題として全く言及しない。ある一人の門弟について、その善知識が誰であるのか、それは親鸞が認定する問題ではなかったからである。

二、最初期の親鸞門流に見られる導き手の姿

最初期の親鸞門流は、親鸞と覚如や存覚との間を結んだ存在として重要である。彼らの間には、法然を通して親鸞を理解する傾向とともに、自己の正統性を示す論理として面授、口伝が重視され、導き手の位置づけについて大きな関心が持たれていた。

彼らの導き手に対する意識について検討すると、まず、光明本尊からは、導き手は名号・光明の具体相であり、親鸞とその門流は法然門下の同行であるという意識が窺われる。さらに、門徒集団の中で定められた掟を検討すると、師は一門徒集団の主宰者、善知識は主宰者を含めて門徒集団内で指導的立場にある先輩などを指していたようである。つまり導き手に対して、同行意識と師弟意識が同時に持たれていたと考えられる。同行意識が強い場合に、その導き手は善知識と呼ばれたと思われる。さらに、善知識については救いの成就に関わるという意識も持たれていたと考えられる。

また、最初期の親鸞門流には、知識帰命的信心が見られた。それを示す例が『信海聞書』と仮称される書物である。当時有力な知識帰命説は時衆にみられたが、その成立に先行しているのが『信海聞書』である。このほかにも親鸞門流内で知識帰命的信心を説くものに『還相回向聞書』や『他力信心聞書』などを挙げることができる。親鸞門流の中には、知識帰命的信心を受容する心情が共有されており、その後、時衆（時宗）の影響を受けていったと考えられる。

三、覚如における導き手の考察

覚如は生涯をかけて親鸞門流を本願寺を中心にまとめようと努めた。教学的には信因称報説など、親鸞の教義上の特色を強調し、門徒たちの信心が親鸞の教えに合致しないと考えた場合には、たとえば仏光寺門徒に対してそうであったように、厳しい批判を加えることでそれを正そうとした。覚如の教学は、廃立の立場で貫かれるものになった。また、覚如は自らを正統な導き手と自認し、それを法然・親鸞・如信の三代伝持によって示そうとした。覚如自身が誰に導かれたのかを示すことが、そのまま覚如が導き手となることの正統性を示す論理となっているのである。

覚如が三代伝持を示す時、法然以下三代はいずれも師や先徳の語をもって呼ばれる。覚如は親鸞門流を浄土異流と差別化し、法然・親鸞を曾祖師・祖師として神格化した。法然・親鸞を人々を導く師と徹底して位置づけ、自身もそれに連なるものとするのである。では覚如は善知識についてどのように見たのであろうか。覚如は本願真実に導く導き手を善知識としている。ある導き手が善知識であるか否かを導きの方向によって判断している。つまり客観的視点で定義づけているのである。親鸞のように自らの獲信を振り返って導き手を善知識と仰ぐという態度ではなく、一人ひとりの行者の視点から善知識を見ることをしていない。覚如は自身を導き手と位置づけ、その上で導きの方向を厳格に判定し、誰から教えを聞くべきか明ら

かにしようとするのである。そして、善知識から法を聞きながら信心を得ない行者が存在することは、その行者の宿善の問題として説明されるのである。

ところで、覚如は相承を示す場合に善知識の語は出さない。善知識には相承する性格を見ていないといえる。覚如において善知識は過去に存在した導き手のことではなく、現在の導き手であると言える。一方で覚如は、善知識が得ている信心とは、阿弥陀仏の仏智を相承したものである。いま伝えられてきた本願力回向の信心は、過去の導き手を経てきたものである。覚如は、善知識の信心に歴史性を見ていると言える。

四、存覚における導き手の考察

存覚は、父覚如が本願寺を中心に親鸞門流をまとめようとしたのに対し、本願寺にこだわることはなく、特に緊密な関係にあった仏光寺門徒など、親鸞門流の活動を教学的に支えた。門徒たちの間に親鸞の教義を誤って継承する者があっても、それを責めるより、穏やかに導き、他から門徒たちに謗難があつた時には、それを護ろうと努めた。教学的には、法然浄土教の立場から親鸞を理解し、信心を根底にした念仏往生を主張する立場に立った。存覚の立場は当時の親鸞門流の傾向に一致し、門徒たちに受け入れられた。

存覚は善知識を総じては諸仏・菩薩とする。その上で、阿弥陀仏の本願真実に導く導き手を善知識とする。さらには法を聞かせる縁

になる者をも善知識と示している。存覚は導きの方向によって善知識を規定しているのである。これは覚如と共通する客観的定義法である。また存覚は善知識に法を聞いても信心を得ない者がいることを、覚如同様、その行者の宿善によって説明する。

存覚の最も特徴的な見方は、過去の導き手を善知識と示す場合があることである。善知識と師の導きの方向がともに本願真実である場合、両者の区別が曖昧にされている。存覚は「次第相承の善知識」という表現を用い、一般に師によって示される相承を善知識においても述べるのである。

存覚の善知識の見方は、存覚の親鸞門流に対する態度に裏打ちされたものと考えられる。存覚は、覚如と異なり、相承の系統にこだわらない。自身が承けた相承を語らず、門徒たちが相承について、それぞれの系統を主張することを容認している。門徒たちには光明本尊から窺えたように、親鸞以下の導き手を法然門下の同行と見る傾向が見られたが、存覚も同じ立場に立ったと考えられる。存覚は同行の側面も持つ善知識の語によって、特に親鸞以降の導き手を示し、その中で行われてきた相承を述べているのである。こうして「次第相承の善知識」という表現が用いられた。存覚の善知識の用例は、当時の門徒たちの意識によく合致している。門徒たちに対する存覚の柔軟な態度がうかがえる。

五、蓮如における導き手の考察

最後に蓮如が導き手をどのように考えていたのか、善知識を中心に考察したい。

蓮如は親鸞を開祖とする「浄土真宗」を立て、門徒を本願寺を中心に組織しようとした。蓮如の教化は急速に成果をあげ、教団は劇的に拡大した。その結果、蓮如が門徒の統制に苦勞する場面も生じた。知識婦命など、いわゆる異安心への対応を種々に迫られているのはその一例である。

さて、蓮如は善知識を阿弥陀仏への帰命を勧める使いとしている。導き手の導きの方向を客観的視点で判断して善知識を規定しているのである。善知識から法を聞きながら信心を得ない者がいることを、その行者の宿善によって説明する。これらは覚如や存覚に通じると言える。さらに蓮如には善知識の意義を限定するような説示がしばしばみられる。これは無理な教化を行って社会と摩擦を起こす門徒を止めるものである。蓮如の善知識への言及には教団の実態が強く反映していると言える。また、蓮如は過去の導き手を善知識と呼ぶことはない。善知識は現在の導き手なのである。相承について蓮如は師や先徳の語を用いて示すが、親鸞から自身に至るまでの相承は述べない。親鸞一人に焦点を絞り、親鸞への報謝を強調する点に蓮如の特色をみることができ。

また、蓮如に特徴的な善知識観として、非人格を善知識とする点

が挙げられる。無常なるさまを善知識とするのである。家族との死別を多く経験した、蓮如自身の体験に根ざす独特の善知識観である。

結、本論の成果

以上の検討の結果、導き手の位置づけは親鸞から蓮如に至るまでに浄土真宗門徒の関心事であったこと、善知識の見方について、親鸞の視点と覚如・存覚・蓮如の視点との間に大きな相違があること、さらに、覚如・存覚・蓮如もそれぞれに特色ある善知識観を持っていることが明らかになった。そして、この四者の善知識観には、それぞれが背負った課題が反映されているのである。

親鸞の課題はまず自身の救いであった。その立場からの善知識観である。親鸞は自らの獲信過程を振り返り、善知識を仰ぐ。善知識は獲信の行者一人ひとりに個別的なものである。親鸞は善知識を諸仏・菩薩と述べる他、一般化された客観的定義を与えることはない。

これに対して、覚如・存覚・蓮如は共通して、善知識に客観的な定義を与えている。阿弥陀仏の本願真実に導く者を善知識とするのである。親鸞のように、個々の行者の立場から論ずるのではない。そのため、同じ善知識から法を聞きながら、信心を得る者と得ない者がいるという事態が生じている。それを行者の宿善によって説明する。親鸞と覚如・存覚・蓮如の間には、このような展開を見ることができる。

覚如・存覚・蓮如の間にも、導き手の教学的理解の違いが見られ

る。最初期の親鸞門流にどのように接するか、その方針の相違が、覚如と存覚との相違を生んでいる。覚如は親鸞の教学的特色を強調し、それを外れる門徒には厳しかった。導きの方向を厳密に考え、「善知識」を示すことを通して誰から法を聞けばよいのかを表そうとしているのが覚如である。存覚は本願寺にこだわることなく門徒の活動を柔軟に支えることに力を尽くした。存覚の善知識観は、当時の門徒の中で受容されていた意識に近いものである。存覚はそうした意識を承け、それを教学的に調えたのである。蓮如の善知識観もまた、急速に拡大する門徒の動向に影響を受けている。蓮如は無理な教化に走る門徒を止めるために善知識の意義を相対化して限定的に示している。また、非人格である無常観を善知識とし、信心を勧めている。これは蓮如が常に平易かつ印象深い教化を目指していたことのあらわれである。このように、覚如・存覚・蓮如における導き手の位置づけは、教団の存在を前提に展開しているのである。

以上のように、浄土真宗における導き手の見方について教学史的に確認することができたことが本論の最大の成果である。また、本論では最初期の親鸞門流を取り上げた。彼らの導き手の位置づけは、存覚のそれにつながるものである。史料の制約がある中で親鸞門流を教学史の流れの中に新たに位置づけることができたことも、本論の特色といえる。